

■中村十作 新潟の庄屋の家出身ながら、真珠養殖しようと渡った宮古島で、人頭税を知り、その廃止に命をかけ実現した。
なかむらじゅうさく
大政奉還・・・1867＝ 戊辰戦争で官軍が長岡に向かう頃、越後国頸城郡の高田城に近い豊原村稲増で、代々庄屋を務めてきた中村平左衛門と母キクの第七子五男(十人兄弟)に生まれる。

明治維新・・・1868＝ 1歳： 斜陽の道をたどる生家は、子沢山もあって、家計が苦しいなか、

明治6年政変 1873＝ 6歳： 付近の高野村に初めてできた学校、宮島小学校高野分校に入学。

三つの反乱・1876＝ 9歳：

琉球処分・・・1879＝12歳： この年、琉球王国が廃止され、沖縄県になる。

明治14年政変1881＝14歳： 優秀であったことから、卒業するとともに、すぐ上の兄同様、教員になって家計の担い手になるうち、

内閣発足・・・1885＝18歳：

国民之友始・1887＝20歳： 徴兵され、横須賀の海兵団に入隊、海防艦金剛に配属されたことから、初めて、越後の田園を出る。
初の対等条約1888＝21歳： 沖縄近海の演習で台風に遭い、骨折して横須賀で入院、たまたま入院仲間から真珠養殖の話聞いて、殖産を夢見るようになり、そのため上司の薩摩軍人に、東京に出て勉強したいと話すと賛成してくれ、

帝国憲法発布1889＝22歳： 除隊になるや、東京専門学校(現早稲田大学)に入学、越後人の多い神田の本屋街に出入りし、
帝国議会始・1890＝23歳： 上野で開催された内国勲業博覧会に出品された御木本幸吉のアコヤ貝を見、
足尾鉾毒始・1891＝24歳： イギリス人の書いた「海産論」を知って読むなどして、 綿密な事業計画を立てると、
大本教・・・1892＝25歳： 両親に手紙するとともに、中退して、貨物船の水夫となり、オーストラリアで白蝶貝の採取作業を見学して帰国するや、*真珠養殖事業のため、奄美大島に渡航して、夜光貝を発見、さらに南を目指して八重山の宮古島に至る。10年前に糖業指導者として八重山に派遣され、官を辞して後、石垣島で農場経営を始めたばかりの田村熊治と知り合い、その縁で、宮古島農業試験場に精糖技師として着任した城間正安の家に滞在、特別な真珠をつくる黒蝶貝を発見する一方、“人頭税(にんとうぜい)”という過酷で不合理な税による貧困と差別に苦しむ農民の姿、その上に君臨する士族たちの傲慢さをまざまざと見せつけられ、人頭税廃止運動の先頭に立つことを決意。

郡司千島探検1893＝26歳： 城間とともに当時の沖縄県知事であった奈良原繁に人頭税の廃止を訴えるも、士族らの激しい反発からなかなか要求が呑まれることはなかったため、これを含めて県政改革全体を目指す城間正安のほか島民三人とともに上京、在京の弟の十一郎や同郷(戸狩村出身)の読売新聞記者増田義一(後に実業之日本社を創立し、衆議院議員にもなる)らとともに請願活動についての方策を検討し、政界の名士や実力者を歴訪し、協力を求める。共鳴した東京専門学校在学中の第十一郎が作成してくれた請願書を帝国議会へ届けに向かい、道中では薩摩・琉球士族や警察による妨害もあったものの、新聞に載せる記事原稿を作成、増田の尽力で人頭税の非社会性を新聞各社が記事にし、大隈ら有力な政治家の理解も得ることができた。

日清戦争始・1894＝27歳： 笹森儀助がこの年刊行した「南島探検」にも、宮古島の人頭税による過酷な農民の生活が書かれ、政治家など多くの人々の胸を打ち、人頭税廃止運動に貢献した。中村と城間、農民代表の西里蒲、平良真牛とともに当時の内務大臣井上馨へ「人頭税廃止請願の建議」を、大隈重信に従い東京専門学校設立に尽力した高田早苗議員の紹介を得て、帝国議会の貴族院、衆議院に「沖縄県宮古島宮古島々費軽減及島政改革」と題した請願を提出するも、島民の不安は消えず、デマも広がるなか、内務省で会ってくれた一本喜徳郎書記官が調査に来島し、真摯な農民の様を復命したこともあって、島民に盛大に出迎えられる。再び上京して請願すると、

日清戦争終・1895＝28歳： *それを認めた内務省は県政改革を閣議に諮り、奇跡ともいえる請願可決、ついに人頭税廃止が決定。
白馬会・・・1896＝29歳： 何事もなかったように、宮古島民らの資金提供で水産組合を設立し、自ら代表になって養殖事業を再開。
Bushidou・・・1899＝32歳： その間、 真珠養殖のため、無人島(ラサ島)を探検調査し、
ビアノ国産化・1900＝33歳： 母キクが死去。 其の借用を国に出願、それを受けた国は、沖大東島と命名して沖縄県に編入したり、
田中正造直訴1901＝34歳： 続いて、父平左衛門も死去して、一時帰郷。
日比谷公園・1903＝36歳： 宮古、八重山に人頭税廃止の条例が施行され、 ついに260年以上も続いた人頭税制度は廃止となった。

日露戦争終・1905＝38歳：

アラビヤ 創刊・1908＝41歳： 帆船をチャーターして、フィリピンからベンガル湾海域での調査を行うなどの破天荒ぶりも、
韓国併合・・・1910＝43歳： 結局、奄美大島で真珠の養殖事業を開始し、
明治天皇没・1912＝45歳： 渡辺理一によって 宮古島に設立された真珠養殖場での技術を担当しながら、
本格政党内閣1918＝51歳： 黒真珠の生産に一応の成功、やがて真珠養殖が軌道に乗ると、
大暴落・・・1920＝53歳： 元沖縄県内務部長横内扶の娘夏子と結婚、 京都(左京区)に定着、奄美や宮古に出張して、真珠を持ち帰り、京都で加工してヨーロッパなどに輸出。

原敬首相暗殺1921＝54歳：

水平社結成・1922＝55歳： 長男重哉が誕生、
金融恐慌・・・1927＝60歳： 富士真珠(株)を設立し、半円黒真珠をスペインに輸出するなど、真珠養殖事業に打ち込んでいたが、
海軍軍縮条約1930＝63歳：
満州事変・・・1931＝64歳：
日中戦争始・1937＝70歳：
第二次大戦始1939＝72歳：
大政翼賛会・1940＝73歳： 戦争の激化で事業が禁止となってもまもなく、
日米開戦・・・1941＝74歳：
創価学会検挙1943＝76歳： 京都の自宅にて、胃がんにより、 没した。

生前の中村は実家に人頭税廃止の活動の一切を語っておらず、実家も死後の1963年になって宮古島の砂川中学校の校長よりの手紙を受け取って、初めて知ったという。その後、谷川健一が、中村十作の実家で、第十一郎の日記を掘り起こし、宮古農民代表の上京後の行動が明らかになった。
人頭税(にんとうぜい)とは、1637年から、宮古・八重山列島に適用されていた税で、所得や納税力に関係なく人頭数(人口)を基準に穀物や織物などを納めさせるもので、当初は役人の見立てで税を納めさせられた。1710年には、15才〜50才の男女を四つの年齢層に分け、それぞれの年齢層に応じて男は粟(八重山は米)などを、女は上布などの織物を人頭割に課した。一方で、役人や士族は税を免除され、さらに無償で農民を労役に使える制度もあった。税を納められない農民は牢に入れられ、拷問を受けることもあった。税を逃れるため、自ら手足を切り落とし、不具者になった者も多い。1879年にこの地域が沖縄県となってからも税制度は存続し、農民の悲惨な生活は続き、1893年当時の宮古島の記録によると、その税負担は収穫高の約65%にもものぼっていたように、宮古島の島民たちは重い人頭税に苦しみ、貧困を強いられていたのである。
中村十作の功績は現在も宮古島で語り継がれ、“大和神”とし与那覇村の御嶽に奉られ、宮古島の民俗芸能“アヤグ”にも十作をたたえる唄が織り込まれており、暗黒の歴史に光明を投げかけてくれた大恩人として島をあげて敬われている。地元板倉と宮古島の人々の交流も盛んに行われている。中村十作に関する資料や人頭税廃止運動を支えた人々の資料を展示する記念館が郷里の稲増集落開発センターに設置され、2005年には彼の生家近くに中村十作記念館がオープンし彼に関する資料が収められている。

Wikipedia「中村十作」、ホームページ{いたくら観光ガイド}の「神として祀られた男 中村 十作〜生誕150年〜」、山内玄三郎「大世積綾舟(ウフユウンアヤブニ) 人頭税廃止と黒真珠に賭けた中村十作の生涯」、